

「石見神楽を創り出したまち浜田」の考察

皆さんは「石見神楽」と聞くとどのようなイメージを抱かれるでしょうか。

「六調子」「八調子」という便宜的な区別をしていますが、いずれも心が躍る軽快なリズムと、重厚・活発な情緒豊かな舞によって構成され、特有のビジュアルにより営まれる神楽舞であるといえるでしょう。

今日において、石見神楽を形づくる「石見神楽文化」のほとんどが、ここ浜田市で生まれ、脈々と受け継がれてきました。地域の風土と、ここに生産される材料をもとに、浜田の先人の知恵と努力を結集した文化であることは揺るぎない事実です。その主だった文化は

- * 蛇頭の意匠に代表されるように、木彫り面を凌駕する技巧と造形美を有する、石州和紙製の「石見神楽面（長浜面）」。
- * 石見神楽を象徴し他の芸能にも普及する「石見神楽蛇胴」。
- * 太鼓台や歌舞伎衣裳の様式・技術を導入しつつ、更なる緻密な金糸銀糸の縫い技術や、仕立て技術によって作りだされる「石見神楽衣裳」と、ニクモチ刺繍の技術をふんだんに用いた「石見神楽幕」。
- * 近代の著しい社会変化の中で、俗化を憂い国学者・神職が教導した「改正神楽（八調子）」の詞章と舞ぶり。
- * 石見神楽のバイブルであり、大きな影響力を持つ「校定石見神楽台本」。
- * 神楽用に燃焼形式や燃焼時間を研究された「石見神楽花火」。
- * 夜明し舞に耐えうる長時間の演奏と情趣豊かな音色を奏でる、リコーダー式の「石見神楽笛」。

今日の石見神楽にとって、これらは欠かすことのできない構成要素となっています。そして、これらすべては、ここ浜田市に創始されたものです。これらの文化を全く受容していない神楽が果たして石見地域に存在しているのでしょうか。だからこそ浜田市は、「石見神楽を創り出したまち」なのです。

浜田市に創始された、これらの文化が、現在の石見神楽継承地域やそれ以外の地域へも波及し、影響を与えてきました。

これまで浜田市の観光行政では「石見神楽の聖地」であるとか「石見神楽の本場」とか、ある意味抽象的かつ曖昧な表現で石見神楽文化を生み出したということが発信されてきました。しかしながら、このような表現は、浜田市以外の石見神楽継承地域でも言おうとすれば言えることであり、「石見神楽文化の伝統を創り出したまち」としてのPR表現としては不十分です。

また、これ以外に考慮すべき重要な事柄があります。それは、「石見神楽」という言葉がいつから用いられ、認知されてきたか。ということです。

明治期に入り、神職から氏子有志たちへと神楽の担い手が移った神楽の呼称は当初、個々の集落や地域の神楽として、「〇〇舞子連中」「〇〇神楽社中」のように集落や地域の名前を冠した団体名でした。「おらがとこの神楽」として十分だったからです。しかし、昭和期に入り、様々な社会変化の中で「石見神楽」という地域の神楽の総称が生まれました。

「石見神楽」という呼称は石見地域あるいは島根県を飛び出して、国内外での活動に伴い使用され定着し、認知されたものと考えます。石見地域を飛び出し活動するにあたり、国内外に所在する地域を理解しやすくするため、あるいは県を代表する民俗芸能としての自負によるものでしょう。

ここで、特筆すべきは県内外で「石見神楽」としての取り組み活動のはじまりも浜田市の団体にみられ、その後も「石見神楽」としての活動を重ねることで「石見神楽」認知と定着に大きく貢献しているということです。そして、石見神楽として活動を続けるなかで、浜田市の複数の団体が「石見神楽〇〇社中」のような石見神楽を冠した団体名に改名した事柄がみられることは、「石見神楽」として活動し始めた自負として、あるいは石見神楽としての発信を重視したためと察することができます。今後も、先人が大切にした「石見神楽」を「石見神楽」として発信し、認知してもらう活動をする伝統は継承されるでしょう。

これまで書かせていただいたように、多くの石見神楽文化を創始した浜田の先人に敬意を表し、これから浜田の石見神楽を担う人たちを育み、多くの市民が浜田に創始され受け継がれる「石見神楽」に誇りと自信が持てるよう、浜田市のみがいえる「石見神楽を創り出したまち」というキャッチコピーをきちんと理解し、大切にしてほしいものです。「石見神楽を創り出したまち」は浜田市の誇りです。

今後、石見神楽の伝統のものづくり文化は、残念ながら浜田市のみが継承する文化として、その生産を囲い込むことはできません。ですから、なおさら「石見神楽を創り出したまち」としての事実を後世に語り継ぐことこそが先人に敬意を表し、この地域に暮らす者としての大切な役割であると思います。

そして、「石見神楽」という言葉には、この地域の神楽や地域そのものを広めたいという思いが込められているということを理解する必要があります。「石見神楽」が長らく取り組んできた、地域の大切な観光資源としての事柄は無視することはできないし、ここに暮らす人々の楽しみのひとつとして大きな役割を果たしてきています。これも「石見神楽」の持つ大きな特徴でもあり、文化でもあります。地域の大切な文化として扱われることは勿論のこと、観光資源としても大切に扱われ、文化、観光の両面を十分考慮して、切り離すことなく取り扱われることが肝要です。

現在検討している「石見神楽拠点」は、このような「浜田市の石見神楽文化」を間違えることなく、多くの市民、あるいは浜田市を訪れる市外、県外の人々が学び、後世に伝え、「浜田市の石見神楽」を発信することが最も重要であり、整備する意義ではないでしょうか。

〈文責 小 川 徹〉

〈参考文献〉

篠原実『校定石見神楽台本』神楽振興会、1954年

俵木悟「八頭の大蛇が辿ってきた道—石見神楽「大蛇」の大阪万博出演とその影響—」島根県古代文化センター『石見神楽の創造性に関する研究』2013年

島根県立古代出雲歴史博物館『石見神楽—舞を伝える、舞と生きる—』ハーベスト出版、2013年

小川徹「ふるさと浜田に生きる私の石見神楽論—演目「神楽」から見る通説に対する疑問提起と浜田の未来への提言—」石見郷土研究懇話会『郷土石見』第113号、2020

小川徹「ふるさと浜田に生きる私の石見神楽論—石見神楽八調子（西音）の伝播の整理と社中記念事業開催から考える—浜田の石見神楽の未来」石見郷土研究懇話会『郷土石見』第117号、2022年

小川徹「舞手から見た石見神楽の変遷と伝播と継承—演目「鍾馗」を事例に舞の変遷とものづくりを語る—」山陰民俗学会『山陰民俗研究』第27号、2022年

安西生世「石見神楽の演目「大蛇」の誕生—オロチが物語る石見神楽の文化と技術—」國學院大學伝承文化学会『伝承文化研究』第19号、2022年

安西生世「植田晃司と石見神楽「大蛇」—石見神楽の〈オロチ〉誕生が地域に与えた影響と技術継承の問題—」山陰民俗学会『山陰民俗研究』第28号、2023年

小川徹「石見神楽における継承活動の現場論」山陰民俗学会『山陰民俗研究』第29号、2024年

安西生世「ムラの神楽舞から「石見神楽」へ—名辞の成立をめぐる—考察—」國學院大學伝承文化学会『伝承文化研究』第21号、2024年